

編集後記

この編集後記を書いて
いる二〇一八年が暮れよう
としている。この暮れに、私は改めて、
ある知識人のことを考えていた。それ
は、加藤周一である。加藤が亡くなっ
たのは、二〇〇八年一月五日で、今
年は一〇周年にあたる。加藤が生まれ
たのは一九一九年で、二〇一九年は生
誕百年となる。

私は二月九日、札幌市民が主催す
る「没後十年 今日是一日 加藤周一」
というイベントに招かれ「加藤周一と
めぐる仏像様式」という前座講演と、
小森陽一氏と「加藤さんの思考と言葉
をめぐって」という対談を行った。

なぜ、私が「札幌」で「加藤周一」
なのか？

私は北海道教育大学札幌校に勤務し
ていた。そのとき、札幌市民による文
学講座で何回か講演したという縁であ
る。ついでにいえば、小森氏は北大出
身で定期的に札幌で講演している。

つぎに、なぜ「加藤周一」なのか、
について。私は加藤さんの最晩年の十
年間に交流があった。そのころ、私は
市民の読書サークル「凡人会」に所属
していて、加藤さんを何度か凡人会に
お招きし、勉強会をしたことがある。

その勉強会の記録は『戦争と知識人』
を読む―戦後日本思想の原点『テロリ
ズムと日常性―「9・11」と「世なお
し」68年』（ともに青木書店）、『ひと
りでいいんです―加藤周一の遺した言
葉』（講談社）、『いま考えなければなら
ないこと―原発と震災をみすえて』（岩
波ブックレット）として刊行されてい
る。

また、加藤さんのライフワーク「朝
日新聞」夕刊掲載の「夕陽妄語」が、
ちくま文庫から刊行され『夕陽妄語3
二〇〇一―二〇〇八』の「解説」を書
いた。そこにも書いたことだが、加藤
さんを形容するのに、よく「知の巨人」
というフレーズが使われるが、これに

は反対である。

その理由は、①加藤周一が「知の巨
人」であることは当然すぎて、あらた
めていう必要はない。それは前提であ
る。②知識・教養の量、物知りという
意味で「知」をつかうのであれば、加
藤以外にもたくさん「巨人」がいる。

③加藤本人は、自分は「平均的な」日
本人といっており、「巨人」なんていわ
れるのを好んでいなかった。④加藤は
単なる物知りではなく、権力に対して
物申す、異議申し立てをするサルトル
のいう「知識人」である。⑤加藤にお
ける「知」的運動の特徴とは……、こ
れは以下の行論のなかで明らかにしよ
う。

※ ※ ※

知識人としての加藤の出発点ともい
える「戦争と知識人」（一九五九年）に
は「思想は体験から出発するものであ
る。体験が変わらなければ、思想が変
わる」ということは決してない」とある。

抽象的論理的思考に巧みとみなされがちな加藤だか、思想は体験から出発するという。どういう意味だろうか？

印象に残っていることが、いくつもある。

私が加藤を最初に「見た」のは大学生のときだ。私は加藤の講義を受けた。三〇〇人ぐらいのキャバの教室だったが、超満員で熱気が溢れていた。

そのころ加藤はメヒコ（と加藤はいう。メキシコである）と日本を往復していた。なぜ、加藤はメヒコにいったのか？ コレヒオ・デ・メヒコ大学に招聘されて、アジア・北アフリカ研究センターへ出講していたという事情がある。しかし、それだけではない。

そのころ、加藤は文学史の金字塔『日本文学史序説』につづく「日本美術史序説」なるものを構想していた。それはのち『日本その心とかたち』に結実する。その出発点を「はじめに形ありき」、縄文火焔土器においている。開口

部に火焔のような形象がある、きわめて独創的な土器である。

この土器はアジア大陸から列島に移住してきた人々によってつくられた。

一方、列島に渡らず、さらに北進し、ベーリング海峡が出現するまで地続きだったアメリカ大陸へ進出した人々がいた。かれらは中央アメリカでマヤ文明を築きあげた。そして、たとえば「尼僧の四角」と呼ばれる巨大な石造りの建造物を出現させた。

つまり、加藤は火焔土器とマヤ文明を比較するため、メヒコのユカタン半島の密林のなかに存在するウシユマル遺跡を訪れていたのである（ウシユマルの遺跡で）。加藤は帰国後、私の大いに直行、講義を開始した。フィールド・ワークで陽に焼けサングラスをしての講義は、一コマ九〇分を大幅に上回り二時間三〇分以上に及んだ……。『日本文学史序説』のモチーフの一つは、日本の文学概念の拡大である。日

本の文学は小説、殊に私小説が中心で、フランスや中国の文学概念とくらべると極めてせまい。芥川賞で大騒ぎをする所以である。

『日本文学史序説』では、日本における漢文脈に注目し、たとえば、近世文学では定番の松尾芭蕉や近松門左衛門や井原西鶴らのみならず、伊藤仁斎、荻生徂徠、新井白石などの、従来、儒学や政治論として「文学」の範疇にいれられてこなかった人物を組み込んでいる。農民の自己表現として百姓一揆の檄文も「文学」にいられている。近代であれば福澤諭吉、中江兆民らを「文学」に組み込んで論じている。

で、加藤は『日本文学史序説』でとりあげた「文学」作品は、二次資料、つまり、先行研究や解説書を使用せず、すべて、自分の目で読んだもののみを使用したといっていた。

『日本文学史序説』の文学概念は、フランスおよび中国のそれと比較されて

いたが、さらに、第三極として東南アジアの文学概念を取り入れようとして、タイを何度か訪れていた。

加藤には「旅行者の思想」として、世界各地を旅してまわった旅行記の作品群がある。加藤は足を踏み入れたところがないところ、つまり、体験していないところは語らないという体験主義に徹していた。その理由を聞いたところ、こう応えた。

「その国の定番の朝食の光景、たとえば、日本であれば、納豆に味噌汁、のりとご飯とか、そういうイメージ、それから、男の子だとカブト虫とか好きでしょう。そのカブト虫をフランス語ならフランス語でなんというか。そういうことがパツと頭のなかに浮かぶぐらいにならないと。考えるんじゃないと、パツ！とね。ちよつと滞在したぐらいでは、論じることができない」

※ ※ ※
さて、加藤は、日本人の「土着的世

界観」に関して、時間の観念がはじまりもおわりもハッキリせず「いま」の意識がつよく、空間に関して、彼岸の観念が薄い、また、自分が属する集団の外への関心も薄く「ここ」の意識が強い。つまり、「いまここ」に関心が集中する傾向が極めて強いことを指摘していた。

たとえば、釈迦の涅槃像における中国の敦煌の莫高窟のそれと、法隆寺五重塔のそれとの比較。

莫高窟の涅槃像は上層・中層・下層と三層にわかれ、上層は菩薩が配置され、おだやかな表情で、釈迦の涅槃を見守っている。中層は釈迦の弟子たち、彼等の表情は苦痛にゆがみ、号泣し、呆然としている。彼らには釈迦の死の意味しかわからない。

そして、もつとも注目すべき下層には、外道または異教徒が描かれている。かれらは笑い、舞い踊る。それが意味するところは、価値観が変われば、一

つの事件、たとえば釈迦の死の解釈がちがってくる、ということ。涅槃は、過去・現在・未来という時間の観念の超越であり、莫高窟の涅槃像はその超越性を示す（「敦煌所感」）。

これに対して、法隆寺の涅槃像は天を仰いで、胸を叩き、慟哭する弟子たちにフォーカスが絞られている。すなわち、莫高窟と比較すると、上層も、下層もなく、中層しかない。釈迦が死ぬ現在の「いまここ」にのみ関心が集中している（「同」）。

この「いまここ」主義は、自然のうつろいに敏感で、豊かな詩歌の世界を生み出す一方、コンフォーミズム集団主義や、「過去は水に流す」歴史認識、たとえば戦争認識が稀薄になり、東アジア諸国との軋轢の原因になっている。

「体験から出発する」とは「いまここ」から出発することに他ならない。では、加藤の場合、「いまここ」主義の弱点的克服は、どうなっているのか？

私の札幌講演の演目「加藤周一とめぐる仏像様式」のネタは、加藤の論文「仏像の様式」(一九六七年)である。

この論文は日本の仏像彫刻における「現実主義」の混乱を整理し、殊に「鎌倉リアリズム」なる概念を粉碎し、日本の仏像彫刻を、世界の彫刻史に位置づけようとする野心作である。

まず、飛鳥く白鳳様式の仏像は、如来か菩薩が圧倒的に多く、その素材は金銅であることを指摘する。次に密教伝来以降、明王などが多くつくられ、鎌倉に至って頂相、すなわち、個性をもった高僧の像が出現する。その素材は細部を表現しやすい木である。

如来・菩薩・明王・天部・羅漢・十大弟子・高僧など、イコノグラフィとその素材は対応関係にある。如来・菩薩には、慈悲などの抽象性が求められ、他方、実在の高僧の頂相には個性が求められた。したがって、イコノグ

ラフィ어의歴史の変遷を考慮しないと、突如、「リアリズム」が鎌倉時代に出現したかのような、錯覚を起こすことになる……。

こうして、日本の仏像彫刻を具体的に検証しつつ、抽象化して世界彫刻史に位置づけていくわけだが、加藤はなぜ、この論文を書いたのだろうか。一九七八年の追記で、こう述べている。

「一九六〇年代に私はカナダ西海岸の港町ヴァンクーヴァアのブリティッシュ・コロンビア大学で日本美術史を講じていた……私は、日本の仏像をみたこともない学生に、六世紀から一四・五世紀まで、仏像様式の歴史的發展を説明しなければならなかった。その過程で、私は二つの疑問をもつようになった。第一に、そもそも日本の仏像の発展史が、カナダの大学生にとって、どういう意味をもつか。別の言葉でいえば、特定の時代に特定の文化のなかでおこった現象が、彫刻の歴史一般に

とつての、どういう普遍的な意味を、示唆し得るか。第二に、仏像の様式上の特徴を叙述するのに、従来の美術史家が用いてきた概念の混乱を避けて、もっと明瞭で、もっと内的斉合性のある概念的枠組を用いることはできないか」。

やはり、加藤は日本の仏像について、どうカナダの大学生に講義するか、という具体的な問題、体験から出発していた。加藤の精神の運動は、「いまここ」における具体的な体験から出発して、必ず普遍へ、一般化へ向かう。これが加藤の「知」である。「巨人」などというくくり方では、この精神の運動を捉え損なうであろう。そして、「いまここ」主義が強い日本人にとって、この加藤の精神の運動には、その弱点を逆に創造的に組み替えるヒントがある……。時は過ぎゆく。この年の暮れに私は、こんなことを考えながら、一人の知識人の軌跡をみつめていた。(小川記)